意見陳述

２０２３年10月19日　渡具知武清

私は、名護市旧久志村の瀬嵩という集落で生まれ育ちました。辺野古の海、大浦湾が集落の目の前にあります。

高校、専門学校時代は瀬嵩を離れていましたが、長男ということもあり、２０代後半で生まれ故郷の瀬嵩に帰ってきました。終の棲家として、家も建て結婚もしましたが、結婚後、なかなか子供に恵まれませんでした。

やっと子供を授かった頃、辺野古に新しく米軍基地を作るという話が持ち上がりました。当初は、当時の名護市長を先頭に、ほとんどの名護市民が基地建設反対！でしたので、あまり関心もありませんでした。しかし、その後、瞬く間に名護市長が賛成に回ったため、どうなるんだろうとその行方を案じ、勉強会にも参加するようになりました。

初めて勉強会に参加した時の衝撃は今でも忘れられません。海に浮かぶ撤去可能なヘリポートとはいえ、その巨大さに愕然としました。私の生まれ育った大切な大浦湾に米軍基地を作らせない！これから生まれてくる我が子にも、この素晴らしい大浦湾を残したい！という思いから、基地建設反対運動に参加するようになりました。なにか行動を起こさずにはいられなかったのです。

まず市民投票を行うための署名活動に参加しました。仕事の合間をぬって、時には仕事を二の次にして署名集めに奔走しました。市民投票が実施されることが決まると、今度はハンドマイクをもって、生まれたばかりの長男と妻の３人で名護市内を回って、それこそ朝から晩まで、名護市のいたる場所の道角にたち、この切実な思いを伝えて歩きました。運命の1997年12月21日、市民投票で基地建設反対が勝利をおさめました。これで基地問題も終わる、、、私を含め誰もがそう思いました。

しかし現実は違った。私は落胆しました。本当に「基地建設反対票が勝ったのに、なぜ基地建設をやめないんだ」と落ち込みました。しかし、落胆し続けてはいられませんでした。息子の笑顔に一人の父親として勇気をもらいました。そして、この子の未来に基地はいらない！豊かな自然を残すのが親としての務めだ。その思いでこれまで行動してきました。

今年で27年です。四半世紀をすぎました。

この間、たて看板、横断幕、どれだけ作成したでしょう。2000年に始めたメッセージ入りのハンカチを樹の葉に見立てた「基地いらない！平和の樹」は、今も立ちつづけています。2004年からピースキャンドルも始めました。土曜日の夕方、キャンプシュワブゲート前で、ペットボトルで作ったキャンドルを持って、道行く車に訴える活動です。ピースキャンドルも現在も続けています。私の家族写真は、どれも抗議集会や平和集会、デモ行進やピースキャンドルと、基地建設がらみの写真ばかりです。

笑い話のようですが、事態は深刻です。この基地建設問題さえなければ、私達家族、一人ひとりが集会に参加する時間を、デモ行進に参加する時間を、自分の時間として有意義に過ごせたのです。基地建設問題に反対の立場で携わっているすべての人々が、自分の時間を自分自身のために過ごせたのです。

大浦湾には軟弱地盤があるため、未来永劫、絶対にこの米軍基地を完成させることは不可能です。何10年たっても完成しない米軍基地のために、これまで１兆円という我々の血税を湯水のようにつぎ込み、これから先も2．5兆円も使いこむと県の試算では出ています。

27年間も我々の地域を分断し、地域住民の心を翻弄してきた。27年前に「米軍基地はいりません」とはっきり伝えたにも関わらず、そして、その後27年間に渡って今日まで、県民投票や県知事選挙とありとあらゆる形で、「基地建設をやめて下さい」という私達の気持ちを、国家権力にのさばっている皆様にお伝えしているにも関わらず、諦めないどころか、ますます強権的になっているところは、本当に許しがたい思いでいっぱいです。

もう27年です。辺野古の基地は絶対完成しません。いや完成さません！いい加減、目を覚まして、私達国民の血税の無駄遣いはやめて下さい。私達だって、同じ日本国民です。皆さんと同じように、平等に生きる権利があります。これだけ「基地はいりません」と言っているのですから、真摯に向き合って、辺野古への基地建設をやめて下さい。

裁判所へのお願いです。私たち辺野古周辺住民は、辺野古に基地ができることによって直接的に被害を受ける当事者です。被害を受ける当事者に目を向けて、原告適格を認めないとして却下の判決を出すのではなく、法の番人として正義に叶った判決を出して頂きますよう、どうか、どうか、よろしくお願い致します。